

# ナースキャップの意義と弊害について

橘病院 整形外科

○ 山元加代子・柳橋紅美子

# 研究目的

看護業務におけるナースキャップの意義を機能、衛生面で再検討し、スタッフおよび患者さんにとっての、キャップの持つ意味をもとにキャップの意義と弊害を検証する。

# 研究方法

## ①キャップに対するスタッフの意識調査

研究対象 : 当院看護婦 30名

研究方法 : キャップに対する思い入れをふまえ、看護業務の中でのキャップの必要性についての意識調査を行う

## ②キャップの交換期間と培養検査

研究対象 : ナースキャップ・看護婦6名

研究方法 : 交換期間が2週間以内と以上にわけての培養検査

## ③キャップレス後1ヶ月のスタッフ、患者さんへのアンケート調査

研究対象 : 当院看護婦 30名、外来患者さん10名、病棟患者さん10名

研究方法 : キャップレス後の感想、意識の変化について、患者さんの意見聴取

# 結果

## ナースキャップについて

### 必要性

必要:5名 不必要:19名 どちらともいえない:6名

### 清潔度

清潔:0名 不潔:24名 どちらともいえない:6名

### 実用性

実用的:8名 実用的でない:22名

### 安全性

危険:22名 安全:8名

# 【ナースキャップの意義】

## 肯定意見

- ・キャップをつけることで気持ちも、背筋もひきしまる。
- ・キャップは看護婦のシンボルであり遠くから見ても看護婦とわかりやすい。
- ・看護婦としての意識が高まり向上心、使命感が出る。
- ・愛と尊厳の象徴
- ・まとめ髪がしやすい。

# 反対意見

- ・着けるのが手間、仕事上邪魔、不衛生。
- ・ナースを見分けるには必要だが、時間で解決可能。
- ・キャップがなくてもナースとわかる仕事をするべき。
- ・画一したものでなく個性が必要。
- ・カーテンや点滴に引っかかる、走ると落ちそうになる。
- ・看護はもう女性だけの職業ではない。
- ・キャップがないと個性があるヘアースタイルが選択できる。

# ナースキャップ培養結果・6名

グラム陽性球菌 ----- 6名

グラム陽性桿菌 ----- 4名

MRSA ----- 1名

# キャップレス後のスタッフ(30名)への調査

キャップレスがいい : 27名  
以前より髪型に気を使う: 10名  
清潔度の悪化なし : 15名  
動きやすくなった : 13名  
邪魔にならない : 10名  
人のキャップの汚れを気にしなくていい: 3名

再着用すべき: 3名  
髪がまとめにくくなった : 3名  
看護婦としてみてもらえない: 9名

# キャップレス後の患者さん(20名)への調査

印象としていい感じ : 10名

信頼感や仕事内容に関しては問題なし: 20名

キャップレスがいい : 9名

キャップが必要 : 5名

不衛生 : 3名

見分けがつかない : 5名

# キャップ廃止後の意識調査(東京医科歯科大学)

プラス影響 — 専門職としてのあり方、身だしなみを考えるようになった(61%)

マイナス影響 — 髪をまとめするのが大変、髪型がだらしなくなった(7.3%)

# ネームプレート



—Department of Orthopedic Surgery, Tachibana Hospital

# キャップ着用条件

最低でも2~3日以内に交換

糊づけは禁止

重ね置き禁止

頭部の発汗に影響されない、湿気がつかない

走っても落ちにくいなどの着用の安定が必要

カーテン、点滴、モニターなどにあたらない

動きが激しくても痛くないキャップ

個性が出せるキャップ

# キャップレス開始日

当院は、次の理由で2001年8月1日に  
ナースキャップを廃止しました。

1. 一目見て看護婦さんと思われるのではなく、キャップに頼らない  
自立した責任感のある働きぶりで自分自身を患者さんに示すこと。
2. キャップの画一性、機能上の利点がないこと、衛生上の問題から  
キャップの意義はない。

キャップがなくてもナースとわかる仕事をするべきで、  
専門職としてのあり方・髪型を重視した身だしなみ・  
内面的な姿勢を考えなくてはいけない。  
髪型がだらしなくなった…では、看護職というより  
社会人としての資質を問われます。  
キャップを着けないために、看護婦として認識されない、  
信用されない、気が弛むようでは、専門職といえない。

# 結語

ナースキャップの意義、必要性について討論を重ね、キャップ廃止にふみきった。反対意見もあったが、キャップレス後の機能的、衛生的な面での受け入れは良かった。しかし、キャップに頼らず仕事内容で自分を示す、キャップをはずすことによる意識改革という面での反応はちまちで、今後専門職としてどうあることで患者さんに信頼される看護婦になるのかを考慮しなくてはいけないことが明らかになった。